

もうひとつのオリンピック

いとう あきひで
伊藤 彰英

●日本基幹産業労働組合連合会・事務局次長

東京オリンピック・パラリンピック開催まで、ちょうど1年となった。代表選手の内定や新しい施設の完成、チケットの抽選等、徐々に盛り上がりを見せ始めている。

パラリンピックは脳性麻痺や視覚障がい、手足切断などを含んだ身体に障がいのある方を対象とした大会であるが、実は聴覚に障がいをもつ方はパラリンピックに出場することができないことをご存じであろうか。こうした方々のことを英語では Deaf（デフ）と呼び、聴覚障がいの方のオリンピックであるデフリンピックをめざすことになる。ただし、このデフリンピックはオリ・パラと異なる年に異なる国で開催されることもあって知名度が低く、調査によると日本での認知度は数%にとどまるそうである。そのため、選手が会社にデフリンピックに出場することを相談、報告したところ、そうした競技の存在を信じてもらえずに困ったという逸話もあるほどである。

デフリンピックは1924年にフランスで開催されて以降、1世紀近くも継続しており、実は1960年に始まったパラリンピックよりも歴史が古い。国際ろう者スポーツ委員会は、デフリンピックの運営をデフ自身で行いたいという強い意識のもと、コミュニケーションの全てが国際手話によって行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外、オリンピックと同じルールで運営される。まさに障がい者自身が運営する、障がい者のための国際的なスポーツ大会である。2017年のトルコ大会では、多くの日本人選手が活躍し、過去最多の6個の金メダルを含む27個のメダルを獲得した。

一方、競技者に目を転ずれば、学生以外のほとんどのデフアスリートは仕事と競技を両立しながらデフリンピックをめざしており、練習時間が少ないばかりか、代表選手でも練習場所は自分で探す必要がある。さらに、デフリンピックなどの国際大会へ選手を派遣する際にかかる費用は自己負担である場合がほとんどであり、デフアスリートが活動するためには経済的支援も必要である。

私の娘は学生時代からデフサッカー日本女子代表のトレーナーをボランティアで行ってきた。昨年は韓国で開催されたアジア太平洋選手権を制して、2020年に開催されるワールドカップの出場権を獲得することができた。本年11月には2021年開催のデフリンピック出場をかけたアジア予選が香港で開催され、当然優勝と出場権を狙っている。目下、まさにその代表合宿が活発に行われているところであるが、スタッフはもちろん代表候補選手も自腹で代表合宿に駆け付けている。強豪なのに、日の丸を背負っているのに、驚くほどサポートは少ない。娘は夜学へ通いトレーナーとしての腕を磨きつつ、昼間は学費と遠征費を稼ぐために仕事、週末は代表合宿や遠征へと足を運ぶ。

誤解を恐れずに言えば、欧州の福祉先進国と比較して、日本のデフアスリートは相当な個人の費用負担を強いられる状況にある。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本もスポンサー企業が集まりスポットライトの当たる競技や選手の発展だけでなく、その波及効果をさまざまどころまで与えてほしいと切に願う。